

Title	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ21 まえがき
Author(s)	秋田, 茂; 飯塚, 一幸; 堤, 一昭
Citation	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ. 2024, 21, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98877
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

まえがき

本書は大阪大学歴史教育研究会の21冊目の活動報告書である。

大阪大学歴史教育研究会は、歴史学と歴史教育をめぐる「高大連携」を推し進めるための恒常的な討議・協働の場として設立された。毎月1度の例会は、2005年4月の設立以来2024年の3月で157回を数えるまでになった。この間多くの大学教員、研究者、大学院生、高校教員がこの会に関わり、発表や討論を重ねてきたことで、会の活動は年を追うごとに充実したものとなっている。

今年度は、1年間を通して「『岩波講座世界歴史』最新版から考える歴史学と歴史教育の架橋」と題する連続企画を実施した。2021年から本年まで刊行された『岩波講座世界歴史』（第3期、全24巻。以下、新シリーズと表記する。）は、第1巻の巻頭論文を現職高校教員である小川幸司氏が執筆したことに象徴されているように、歴史教育の場での活用が明確に意図されている。高校の新たな学習指導要領で導入された「歴史総合」と「世界史探究（日本史探究）」の現場、そして生徒自らが「問い」を立ててその解決に取り組む「探究学習」の場において、新シリーズは今後おおいに参照されるに違いない。本年度の企画は、その成果を新シリーズの刊行が続くなかでいち早く検討する、画期的なものであったといえる。

本企画を実施するにあたっては、新シリーズの編集委員である大黒俊二氏（ヨーロッパ中世）、荒川正晴氏（中華世界とユーラシア東部、東アジア）、林佳世子氏（西アジア・南アジアの近世）、小川幸司氏（歴史教育と歴史実践）、安村直己氏（南北アメリカの近世）、峯陽一氏（アフリカから考える現代史）、木畑洋一氏（20-21世紀現代史）を招いて講演をいただいた。先生方には担当された各巻の構想や以前のシリーズとの違いを論じていただくにとどまらず、関連する複数の巻にも言及しながら、次期シリーズに期待する課題や編集時の裏話まで、毎回充実した話題を提供していただいた。

さらに、各回でコメンテーターとして歴史研究者と高校教員の2名を立てた。歴史研究者については、新シリーズの執筆者に限らず様々な立場の第一線の研究者をお招きし、新シリーズに対する評価や講演を補完する専門的な内容についてお話しいただいた。他方、高校教員側からは、新シリーズと歴史教育との関わりや、それ現場で活用するための具体的な実践案などを提示していただいた。昨年度に引き続きこの形式を採用したことで、改めて本研究会の原点に戻って、授業で使えるコンテンツ（内容）重視の歴史教育の実践を掲げた「高大連携」の試みを強力に推し進めることができたと考えている。加えて、三谷博氏による日本史と世界史の繋がりに関する鋭いご指摘や、勝山元照氏による「歴史総合」との関わりと実践的課題に関する講演も、新シリーズを検討・批判するうえで大変有意義であった。

毎回の例会では、いずれも多くの方にご参加をいただき大変盛況であっただけでなく、質疑応答や討論の際に全国の参加者から寄せられた質問は、研究会での議論を充実させるのに大きく寄与するものであった。

さらに、今年度も大阪大学の歴史系の学生を中心とする大学院生によるグループ報告を行った。受講生には、毎回の研究会に参加し参考文献を読み込む作業を通じて、新シリーズの成果と課題を学び、さらに「世界史探究」教科書の記述や「問い」の分析を行ったうえで、教科書で提示された「問い」をさらに一般化して、最新の研究をふまえて回答する、という課題を課した。学生グループの4人がこの課題に取り組み、半年間にわたる準備の成果を12月の第155回例会においてグループで報告し、さらに、それをもとにしたレポートを共同執筆した。本報告書にはこの成果であるレポートを掲載しているので、ぜひご一読を賜りたい。学生は、それぞれヨーロッパ中世史・東アジア近世史・日本近代史・現代国際関係史という自らの専門を活かしながら、小川幸司氏が提示した「歴史実践」、とりわけ「歴史実践の六層構造」に真摯に向き合い、グループ内でも議論を重ねてきた。それは、教科書の「問い」を検討し、新シリーズを縦横に用いて解答を作成した点で、教育現場への最新の研究成果の還元を目指すものになっている。歴史教育や探究学習の現場で新シリーズを活用するうえでの先駆的な参考事例として、今年度のレポートが全国の高校教員の皆様から参照されるものとなれば幸いである。

月例会以外の場でも、高大連携歴史教育研究会や関連する各地域の研究会などに本研究会の関係者が多数参加し、また堺市博物館をはじめとする外部組織と連携した活動を活発に展開した。それらに関する詳細は、巻末の活動記録を参照されたい。

新型コロナウイルス感染症の影響が徐々に落ち着いてきたため、昨年度から対面を主としつつオンラインを併用するハイブリッド形式で例会を開催した。会場に報告者やコメントーターを迎えて直接議論を交わすことで、研究会は以前の熱気を取り戻した。とりわけ大学院生にとって、報告者に直接質問ができた教育上の効果は大きかったと思われる。ZOOMを活用したオンライン開催の継続により、全国各地から多数の参加者を迎えることができた。次年度もハイブリッド形式を継続しつつ、対面重視での質疑・討論を展開したい。今年度末で複数の教員が退職するため、4月からは新たな体制で研究会を運営していくことになる。皆様には、引き続き例会の会場にお越しいただくとともに、広範なご支援をお願いしたい。

最後に、2023年度の活動にあたり参加・協力して下さった研究者、院生・学生、高校教員、事務職員ほかすべての皆さんに、厚くお礼を申し上げます。

2024年3月 秋田茂・飯塚一幸・堤一昭